ご子息宏行さんと

山口県ゆかりの女性を紹介

人財彩時記

最高齢スイマー 長岡（ながおか） 三重子（みえこ）さん

1914年（大正3年）7月31日生まれの102歳。
100歳の時、世界で初めて1500メートル（短水路・自由形）を背泳ぎで完泳されました。
快挙を続け、25種目の世界記録を持つ
長岡さんの横顔に迫りました。

100歳を超えてなお現役を続けられている秘訣は、「好きな時に眠り、好きな時に起き、好きな物を好きな時に好きな分だけ食べる」という、身体第一の暮らしをすることだそうです。2～3時間かけて食事をされ、取材日の朝ごはんは「すき焼き」とのことでした。

決まった時間に何かをすることは、それだけでストレスになるので、「長岡流の身体が第一の暮らし」は、一切のルールに縛られないそうです。

若くしてご夫君を亡くされたことにより、家業を受け継がれ、類い稀なビジネスウーマンとして、「藁（わら）製品」の卸屋を94歳まで続けられました。

藁（わら）といえば、今ではすっかり見なくなった「莚（むしろ）」「カマス」「蓑（みの）」などがイメージされると思います。ところが、溶鉱炉から鉄を取り出す最後の工程の温度調整に「もみがら」が重宝されるようになり、需要が高まりました。藁（わら）の仕入れで長年培ってきたネットワークの本領を発揮し、電話一本、ファックス一枚で日本全国から集めた「もみがら」を製鉄所に送るというビジネスを展開されました。

また、お友達に勧められて謡を始め、その後本格的な能楽の世界に入られました。能は舞台上では台本が使えないので、全て暗記しなくてはなりませんし、衣装をまとい舞台を縦横に舞うため、体力を使います。身体への負荷を考え、87歳で舞台を降りられました。

酷使した身体を労り、体調を少しでも良くしようと、プールでの水中歩行を始められ、その後、ご子息の宏行さんが選手として出場されたマスターズ水泳大会を見に行かれ、「自分も泳いでみよう」と80歳を過ぎてから水泳を始められました。

周りの人から「大会に出てみたら」と勧められ、軽い気持ちで出られるようになり、もっと速く泳ぎたいと専任コーチからトレーニングを受けるようになると、国内の大会で次々と入賞されるようになりました。

マスターズ水泳の世界大会にも出場されるようになり、88歳でニュージーランド、90歳でイタリアの大会でそれぞれ銀メダル、また、92歳の時にはサンフランシスコ大会で初めて金メダルを獲得されました。更に、94歳でオーストラリア、96歳でスウェーデンの大会と挑戦されました。信じ難いことですが、91歳から98歳までは毎回記録が伸び、自己記録を24回更新されました。

100～104歳の部に出場された時の出場者は長岡さん一人でした。休むことなく挑戦し続けられているのは、他人と比べるのではなく、「努力は報われる」という強い信念に基づくものではないかと思われます。

誰も到達したことのない記録の領域を切り開いてこられましたが、記録にこだわることなく、日々の暮らしを楽しんでおられる様子は、世界大会に挑戦し続ける偉大なスイマーというより、穏やかで優しいお母さんのように映ります。

お気に入りの椅子に腰掛けた長岡さんの素敵な笑顔が心に残ります。

（取材・原田茂、原田浩、柳澤）

記念のメダルやトロフィー（書は101歳の時に書かれたもの）

力泳中の姿（アルバムより）